

# 学校におけるフェーズフリーの導入の可能性と課題

—鳴門市教育委員会の取り組みを中心に—

Possibility and Challenges of Introducing Phase-Free Education in Schools

— Focusing on the Efforts of the Naruto City Board of Education —

谷 村 千 絵

TANIMURA Chie

鳴門教育大学学校教育研究紀要

第 36 号

Bulletin of Center for Collaboration in Community

Naruto University of Education

No.36, Feb, 2022

## 学校におけるフェーズフリーの導入の可能性と課題

—鳴門市教育委員会の取り組みを中心に—

### Possibility and Challenges of Introducing Phase-Free Education in Schools

— Focusing on the Efforts of the Naruto City Board of Education —

谷村 千絵\*

\*〒772-8502 鳴門市鳴門町高島字中島 748 番地 鳴門教育大学 人間教育専攻 現代教育課題総合コース  
TANIMURA Chie\*

\*Basic Human Science for Integrated Studies  
Naruto University of Education

748 Nakajima, Takashima, Naruto-cho, Naruto-shi, 772-8502, Japan

**抄録：**本論文では、フェーズフリーという新しい防災の考え方と鳴門市の学校での実践事例を紹介し、鳴門市教育委員会が作成したこの冊子『いつもともしもがつながる学校のフェーズフリー』の内容から、フェーズフリーを学校に導入する意義や目的、利点について整理した。フェーズフリーは、学校の災害対応力を向上させるのみならず、学習内容に主体的に取り組みやすくするため、学力向上、学校の質（QOS）の向上にも繋がるものであることが示された。さらに、フェーズフリーを学校に導入することで、想定外の自然災害に対応する生活文化を形成し、社会全体の災害対応力が向上する可能性があること、また、学校安全という観点からは教員の仕事におけるフェーズフリーが課題として残っている点が明らかになった。

**キーワード：**フェーズフリー、学校、鳴門市教育委員会

**Abstract :** This paper presents “phase-free”, the new concept of disaster prevention, with a practical case study in a school in Naruto City, and summarizes the significance, purpose, and advantages of introducing phase-free into schools based on the contents of the booklet “Phase-free in Schools: Connecting the Always and the What If” by the Naruto City Board of Education. Phase-free was shown to improve a school’s disaster response ability and made it easy for students to independently take the initiative in learning content, leading to improved academic ability and quality of schooling (QOS). In addition, the introduction of phase-free in schools may develop a culture of living to cope with unexpected natural disasters and improve the disaster response capacity of the whole society. However, from the viewpoint of school safety, the phase-free system remains an issue in the work of teachers.

**Keywords :** phase free, school, the Naruto City Board of Education

#### I. はじめに

令和3年3月、鳴門市教育委員会は『いつもともしもがつながる学校のフェーズフリー』という冊子を発行した。本冊子は、フェーズフリーという新しい形の防災を学校に導入することを提案するもので、鳴門教育委員会が独自に作成した手引書である。(図1)

冊子は、鳴門市教育委員会の古林賢一主査・指導主事(当時)が中心となって取りまとめたもので、フェーズフリーの説明、学校にフェーズフリーを導入する意義や目的、その利点がわかりやすく整理され、鳴門市の学校教員から寄せられた実践アイデアが、教科や領域別に紹介されている。



図1 鳴門市教育委員会作成『いつもともしもがつながる学校のフェーズフリー』冊子表紙

この冊子作成にあたっては、フェーズフリー協会代表理事の佐藤唯行氏およびフェーズフリー協会理事の秦康範氏（山梨大学准教授）、そして筆者に監修、協力が依頼され、ともに学校にフェーズフリーを導入するということについて何度も協議を重ねた。

本論文では、Ⅱにおいて、フェーズフリーという新しい考え方と鳴門市の学校での実践事例を紹介し、Ⅲでは、鳴門市教育委員会が作成したこの冊子『いつもともしもがつながる学校のフェーズフリー』の内容から、フェーズフリーを学校に導入する意義や目的、利点について整理する。

さらに、Ⅳにおいて、これまでの協議などを踏まえてフェーズフリーを学校に導入することの可能性や今後の課題について考察する。

## Ⅱ. フェーズフリーについて

### 1. フェーズフリーの定義と基本的な考え方

フェーズフリーは、一般社団法人フェーズフリー協会が提唱する、新しい防災の考え方である。フェーズフリー協会の代表理事である佐藤唯行氏は、大学在学時に『災害軽減（防災）工学』専攻で学んだ経験からフェーズフリーという理念を提案した経緯について、プロフィールにおいて、次のように説明している<sup>注1)</sup>。

「災害に関する研究活動を開始した大学4年生（93年）以来、世界中で様々な災害が同じように繰り返されてしまう現状を目の当たりにしてきた。その経験・研究に基づき、“防災”という価値を市民一人ひとりに持続的に届けるには公共のサービスや市民のボランティアだけではなく、ビジネスが必要であることを提案する。」

この指摘は、従来の防災の基本的な考え方に、隠れた制約があることに焦点を当てるものである。たとえば、防災の基本的な考え方に、公助・共助・自助という考え方がよく知られている。この3つがうまくかみ合うことで、社会の災害対応力が上がることは誰の目にも明らかであろう。

しかしながらこのうち、公助である公共の行政サービスは税金という制限のある資源で賄われている。そして共助である地域での助け合いは基本的にボランティアである。つまり、時間的、経済的にある程度のゆとりがなくてはじめて参加可能となるのであり、無制限に誰でも可能だというものではない。自助すなわち、自分の命を自分で守る、ということにおいても、日々更新される防災の知識や技術をキャッチアップする主体性と学習能力が必要となり、そのための時間的、経済的ゆとり、個人的資質などにも様々な制限がある。

このように、公助、共助、自助のいずれにおいても、それぞれに根本的な制約がある。つまり、有限なのである。この有限性を超えるためには何が必要か。様々な人が防災にかかわり、公助・共助・自助をつなげて創造的に取り組みを広げ、そして持続していくために必要なこと、それは、ビジネス、つまり経済活動の視点ではないか、ということなのである。こうした考えが、フェーズフリーという発想の出発点にある。

学校教育もまた、様々な人が防災にかかわり、創造的に取り組みを広げ、継続していくことを可能にするための、様々な制限を超えていく活動になりうるだろう。

本協会が発行しているフェーズフリーのコンセプトブック（佐藤他2017）では、フェーズフリーという言葉は以下のように定義されている。

#### フェーズフリーの定義

Phase Free（フェーズフリー）とは、平常時（日常時）や災害時（非常時）などのフェーズ（社会状態）に関わらず、適切な生活の質を確保しようとする概念です。この概念は、フェーズフリーの以下の5つの原則に基づいた商品、サービスによって実現されます。（上掲書 p.38）

フェーズ（phase）というのは、もともとの英語では時期、段階、状況などを意味する言葉である。定義にあるように、フェーズフリーとは、平常時のフェーズと災害時のフェーズの垣根を越えて（フリーにして）、適切な生活の質を確保しようとする概念である。

定義としてはシンプルであるが、この概念を実現するための原則は、5つの点から分析的にとらえられるようになっている。5つの原則の概要は、以下のように説明出来る。

- ①常活性 いつもの、もしもの際にも活用できる
- ②日常性 いつもの暮らしのなかで使える
- ③直感性 使い方とその限界がわかりやすい
- ④触発性 安心や安全に対する意識やイメージを生む
- ⑤普及性 誰でも気軽に活用・参加できる

こうした原則に基づいて、日常と非日常のフェーズをフリーにするものとして、様々なものが開発されている。たとえば、フェーズフリーの紙コップである。この紙コップに付された絵のデザインは、計量の目盛になっている。紙コップは日常でつかうものであるが、災害時にもこの紙コップがあると、粉ミルクのお湯や炊飯時の水の計量がスムーズになる。

他にも、非常時に水を入れて運ぶことができる防水のトートバッグなど、日常で使いながら非日常を想起させ、非日常に役に立つ使い方ができる商品が次々と開発され

ている。

また、愛媛県今治市の「グリーンパーク」や東京都豊島区の「としまみどりの防災公園」、徳島県鳴門市の「渦パーク」など、公共施設としてフェーズフリーの発想を取り入れたものも様々に展開されている。

私たちに身近な鳴門市の渦パークでは、パーク内にある渦ホールの壁面デザインがフェーズフリーになっている。渦ホールの屋内壁面は地上2メートルくらいの高さのところ、上部が白、下部が紺色に美しく塗り分けられ、見た目にも鮮やかではっきりとしたデザインである。2メートルという高さは、南海トラフ地震時にこの地域に想定されている津波の高さである。場内壁面にはこの高さまで津波が来ます、との掲示があり、渦ホールを利用する人は、ここに来るだけで2メートルの高さというものを、体感で理解し、津波が到来した時のこの地域の屋外の様子を想像しやすくなる。

ところで、前述の『フェーズフリー コンセプト & ガイドブック』(2017)では、「誰でもどこでも、アイデアを生み出すことができる」ことが強調されている。

「フェーズフリーは防災という単独の価値とは違い、あらゆる商品やサービスに掛け合わされる付加価値です。そのため、全ての産業において、それぞれの視点で価値を創出することができます (p.30)。」

そして、「フェーズフリーはプラットフォームでもある」として、

「フェーズフリーの考え方で、自分だったらどのような商品・サービスが欲しいと思いますか？フェーズフリーを活用して、あなたの仕事や会社でどのような商品やサービスを生み出すことができますか？」(p.32)

と問いかけられている。日常と非日常のフェーズをフリーにする主体は私たち一人ひとりであることが、積極的に推奨されているところにもこの取り組みの特徴がある。

## 2. 鳴門市におけるフェーズフリーの導入

鳴門市では、平成29年度より市政全体でフェーズフリーを導入している。平成29年度に策定された『鳴門市地域防災計画』において、初めて「フェーズフリー」の記載がなされた。『鳴門市地域防災計画』の「共通対策編」第2章「災害予防」第1節「防災知識の普及・啓発」の第1「方針」において、以下のように記述されている。

市は、平常時や災害時などの社会の状態に関わらず、

いずれの状況下においても、適切な生活の質を確保する上で支障となる物理的な障害や、精神的な障壁を取り除くための施策及びそれを実現する概念である「フェーズフリー」について研究を行い、市民への啓発を図るものとする。

(前掲書 K-2-1 ページ)

なお、『鳴門市地域防災計画』は改訂を重ね、2021年に出された令和3年2月版でも、フェーズフリーについての記載箇所は概ね変更がない。強いていえば、以下に下線を引いて示したように、「平時からの取り組みとして」という点が強調され、また啓発のみならず、「普及」についても努めることが明示されている。

平時からの取り組みとして、市は、平常時や災害時などの社会の状態に関わらず、いずれの状況下においても、適切な生活の質を確保する上で支障となる物理的な障害や、精神的な障壁を取り除くための施策及びそれを実現する概念である「フェーズフリー」について研究を行い、市民への普及・啓発に努めるものとする。(前掲書 K-2-1 ページ)

鳴門市では「なるとビジネスプラン コンテスト」の特別企画としてフェーズフリーアイデアコンテストを開催するなど、啓発に力を入れており、また、近く建設予定の新市庁舎や鳴門の「道の駅」などにも、フェーズフリーが導入されるという。なお、フェーズフリーについては徳島県も注目しており、2021年には徳島県危機管理環境部とくしまゼロ作戦課でも、フェーズフリーアイデアコンテストが開催されている。

## 3. 鳴門市の小学校での実践事例

そして、鳴門市教育委員会でも学校にフェーズフリーを導入する取り組みが展開されてきた。著者がかわりをもった令和2年度には、すでに、通例の学校防災実務者会議でフェーズフリー研修が行われており、依頼のあった学校園においては指導主事によるフェーズフリーの研修が精力的に行われていた。また鳴門市の学校では、毎月1日がフェーズフリーの日と定められている。

フェーズフリーの日や各種研修会においては、ワークショップ等を行い、参加した教員が学校のフェーズフリーとして実践できるアイデアを生み出す取り組みが重視されている。そこで出てきたアイデアをもとに、学校での実践も行なわれ始めた。

ここでは、令和2年度に撫養小学校の5年生の算数、国語、そして体育の授業に関連して行なわれたフェーズフリーの実践を紹介したい。この取り組みについては、NHK 徳島放送局(当時)で防災教育について熱心に取

材や啓発活動を行っていた宮原豪一記者が、撫養小学校を取材し、学校でのフェーズフリー実践として6分ほどのニュース動画にまとめている。このニュース動画は、NHK 徳島のニュースおよびNHKの全国ニュースでも紹介され広く反響があったと聞いている。以下では、その内容について、概要を記したい。

まず5年生、国語の複合語の授業である。複合語の例として「非常・持ち出し・品」や「巨大・地震」など、災害に関連する言葉が児童に説明されていた。国語のカリキュラムである複合語の学習（いつもの学習）のなかで、災害のことを考えるきっかけとなる（もしもの学習）が重ね合わされたフェーズフリーな学習、ということである。

ちなみに、ここでは、災害時の非常持ち出し品には何が必要か、であるとか、どのくらいの規模の地震を「巨大地震」というのかなど、災害に関する用語としての細かい内容や定義までは教えていないことにも注目したい。全ての内容を厳密に教えることよりも、日常の学習のなかで災害に関連する用語に触れることの意義が重視されているからである。

災害に関連する用語に例題として接するのは、児童にとってはごく短い時間ではあるが、こうしたことが繰り返されることで、日常的に、非日常のことを想起する習慣が生まれるだろう。

次に、算数の「速さ」の授業である。教科書には、例題としてキリンやダチョウの走る速さを計算するものが挙げられているが、そこに「津波の速さ」が加えられている。津波の速さは時速約36kmと言われている。これを秒速になおし、キリンやダチョウの走る速さと比較する課題が与えられていた。換算すると津波は秒速約10mである。

ここで、児童の一人が「50mだと5秒なので、私たちよりだいぶ速いと思う」と感想を發表し、「津波が来てから走って逃げても間に合わない」という気づきがクラスで共有されている。というのも、5年生は、ちょうど体育で50m走を行なう。50mのタイムを測ることは多くの児童にとっては初めての経験である。自分が何秒で走れたか、クラスで一番足の速い子は何秒だったかなど、とりわけ強く印象に残る授業の一つではないだろうか。そして、50mを5秒で走れる小学生は、普通はいない。自分の全速力より、そしてクラスで一番足が速い子よりも津波の方が速い、ということを経験した児童たちは実感をもって学ぶことができています。

授業後、ある児童はこの授業について「算数の速さのことが分かって、津波のことも分かって一石二鳥だと思う」と表現し、「津波がくるまえに全力で逃げる」と話している。「キリンの速さは日常使わないけど、津波だったら日頃に大事な役割を果たすので重要だと思った」と

話す児童もいた。そして授業を行なった藤倉新教諭は、「子どもが自分より津波が速いということを、普段の生活の中から考えられていることに驚いた」と述べている。50m走のタイムと比較する、ということは児童たちが発見した学びだったのである。

この学習には、フェーズフリーの5つの基本事項①「常活性」、②「日常性」、③「直感性」、④「触発性」、⑤「普及性」、そして、誰もが主体となりうるというフェーズフリーの基本姿勢が見事に表れているといえるだろう。

①「常活性」について見てみよう。いつもの自分が走る速さと、もしもの津波が来たときの津波の速さを比較することは、「いつも」と「もしも」の両方に生きる「常活性」のある知識を生み出している。

②「日常性」については、どうだろうか。日頃、自分が走る速さ、そして学校の体育で行なった50m走のことが題材となっている点で、児童たちの日常の感性にあり「日常性」の学びである。普段、走る時にも、ふと津波の速さを思い出すことがあるだろう。

③「直感性」については、速さという抽象概念の理解（算数）が、自分の全速力の測定という体験（体育）と児童自身によって結びつけられている点、その結果、津波と自分を、「速さ」という抽象概念において比較できている点、素晴らしい。概念の理解、そして概念と体験の結びつき（いわば概念（理論）と実践の結びつき）という、あらためて考えると大人でも難しいことが、小学生自身によって直感的にクリアされている。そして、おそらく、これが障害物のない直線距離での比較であることも直感的に理解されているものと思われる。鬼ごっここの経験などを振り返ってみれば、まっすぐ走るのが何よりも速く、障害物があったり、ジグザグに走ったりすればすぐに自分の速度が落ちることは、すぐに分かるからだ。

④「触発性」については、どうだろうか。自分の全速力より津波は速い。だから、津波が来ると知ったら、すぐに逃げます、と児童は述べていた。身の安全のために、津波からは率先して避難することの必要性がしっかりと想起されている。さらには、自分より走るのが遅い人たちへの注意喚起の必要性も想像しやすいだろう。

⑤「普及性」については、明らかである。学校教育では毎年5年生が算数で「速さ」を学び、体育で50m走を行なう。全国の学校に広げていける「普及性」がここにある。

そして最後に、誰もが主体となりうるというフェーズフリーの基本姿勢は、この学習に明示的に示されているといえよう。フェーズフリーに参加するアクターが、自分たちでアイデアを出し、フェーズの垣根を乗り越えていく姿を、この実践の教師、児童の双方に見ることができる。算数の速さの単元で、津波の速さを導入した教師

のアイデア、そして、自分たちの体育の授業と算数の授業での学習経験をつなげて「津波は自分より速い」ことを学んだ児童たち。自らが主体となって、災害を自分事としてとらえる効果が、ここにしっかりと表れている。

### Ⅲ. 学校におけるフェーズフリーの導入

#### 1. 『いつもともしもがつながる学校のフェーズフリー』

これまで見てきたように、学校の授業にフェーズフリーを取り入れることは、国語や算数の授業としても、防災としても役に立つことが分かるが、学校にフェーズフリーを導入する意義や目的を、あらためて整理しておきたい。『いつもともしもがつながる学校のフェーズフリー』の冊子では、フェーズフリーを学校教育に導入することの意義や目的は、以下のように述べられている。

「もしもの時に役立つ防災教育を実施するだけでなく、いつもの学校生活や活動、授業のクオリティまでも向上させるのがフェーズフリーの考え方です。」(前掲書 p.2)

フェーズフリーに取り組むことで、教育的価値も上がる、実践のクオリティが上がる、ということが積極的にアピールされている。つまり、フェーズフリーは、クオリティ・オブ・スクール (QOS) を高めるのである。(同 p.2)

特に、本冊子が、フェーズフリーを学校教育に取り入れる利点として具体的に挙げているのは「学力向上」である。学力向上においては、以下の2点から説明されている(前掲書 p.6)。

- ・学習・活動内容を「わがこと」と感じ、量感や自らの感覚等を伴いながら、必要感をもって学習・活動することにつながることができ、「主体的・対話的で深い学び」につながる手法の一つともなります。
- ・非常時の生活や命の視点などを学習に取り入れることで、教科教育を子どもにとってより身近なものとし、単元目標を達成させたり、より意欲的に学習に取り組ませたりすることができます。

1点目は、下線部で強調されているように、こどもたちが必要感をもって学習に取り組めるという利点である。前述の算数の「速さ」の授業にも、このことは明確に示されていたといえよう。そして、現在、文部科学省が提唱している「主体的・対話的で深い学び」につながることも示されている。算数の授業で児童が直感的に自分たちの50m走のタイムと比べ、津波が来るより先に

全力で逃げる必要を理解したことに、まさに主体的で対話的で深い学びの実例を見ることができる。

2点目に説明されているのが、フェーズフリーを取り入れると、なぜ児童は必要感をもって学習に取り組み、主体的で対話的で深い学びができるのか、ということである。

それは、フェーズフリーが非常時の生活(おそらくいつも通りではなくて自分たちが困ることが予想される)や命の視点(自分の命、大切な人やペットの命を守るのだろうかという切実な問題が感じられる)を、日常の学習や活動のなかに織り込んでいるからといえよう。特別な、つまり非日常なこととして防災を学ぶのではなく、日常の学校での授業や活動、学校生活の全般において非日常のこと、命のリスクについて想起することが、学習の必要感を生み、自分や自分の大事な存在を守るために、わがこととして、主体的に学ぶことを可能にし、そして自分の体験や日常生活の様々な場面を振り返り(対話的)、何をどう役立てられるかを自分たちで考え、結びつける(深い学び)ことが可能となっている。

このように、フェーズフリーを学校に導入すると今日の学校教育の意義や目的と重ね合わせることができるのである。

さらに、本冊子では、フェーズフリーを学校に導入することで、学校の災害対応力の向上も期待できると明示している。この点については、以下の4点から説明されている。(前掲書 p.6)

- ・フェーズフリーは「日常」の学校生活にも役に立つものであるため、続けることができます。
- ・教員が、子どもたちの「健康状態」「個別の学習習熟度」「学級内の人間関係」「家庭環境」「人権・道徳教育」「生徒指導」等を意識したり、配慮したりして授業に生かすことは、ごく当たり前のことといえます。その一つに非常時に役立つ要素を加えることで、日々の学校生活の中で子どもたちの防災についての意識を高めたり、役立つスキルを身につけさせたりすることができます。
- ・普段の授業の中で、非常時に役立つ内容を織り込み、取り組むことが可能であるため、余分な授業時間を必要としません。
- ・学校生活の全ての時間(授業・朝の会、掃除・給食・休み時間等)において取り入れることができ、衣・食・住等の生活全般にわたる、非常時に役立つスキルの習得へとつなげることができます。

まず挙げられているのが、継続性である。従来の防災教育では、非日常に備え、地域とも連携して、教師主導で行なうにしても、あるいは外部講師を依頼するにしても、労力を費やして行なう必要性があり、継続が難しいことが課題となっている。防災教育のこの難点を、フェーズフリーは超えていける。

次に挙げられているのが、非日常というフェーズは、今回、新しい取り組みであるが、「健康状態」、「個別の学習習熟度」「学級内の人間関係」等々、いろいろなフェーズを授業中も意識し、活用することは、学校教員としては「当たり前」のことだと確認されている。様々なフェーズをフリーに教育活動に活かしていくのは、むしろ、教師の「十八番」といってもよいかもしれない。その機微を「非日常」のフェーズにも活かすことで災害対応力が向上すると期待されている。

そして、3つ目は、「〇〇教育」の防災教育と異なり、フェーズフリーはそのための特別な授業時数を必要としない、という大きなメリットが指摘されている。これは、多忙が常態化している学校において、説明の必要がないほど大きなメリットであろう。

最後の4つ目は、学校のあらゆる場面でフェーズフリーを導入することが、ひいては子どもたちの生活全般での災害対応力を上げるという指摘である。学校生活は、子どもたちの生活に占める比重は大きい。このことも、説明が不要なほど明らかな利点である。

## 2. 防災教育との関連性

このように、本冊子では、フェーズフリーを学校教育に導入する利点は、学力向上と災害対応力向上の両面において積極的に位置づけることができると明らかにしている。そしてさらに、これまでに組み込まれてきた防災教育との関係についても整理されている。(前掲書 p.5)

そこでは、3つのアプローチに分けて説明されている。1つは、従来から学校で実施されている、避難訓練等の防災に特化した、非日常に役立つ防災教育である。火災を対象とした避難訓練の実施は、かねてより学校に義務づけられており、多くの人に共通理解があるものである。2つ目は、近年、文部科学省が提唱している教科横断的な防災教育である。「総合的な学習の時間」で行なう防災教育、あるいは、学習指導要領の改訂にともなうて、現在では、軽重はあるが、ほとんど全ての教科教育に防災の内容が含まれている。そして、3つ目がフェーズフリーである。

この3つが、それぞれに機能することで、学校や社会の災害に対する脆弱性を小さくすることができる。フェーズフリーがあれば、あとの2つは不要であるかと言えば、そうではない。訓練は重要性であるし、防災に関する基礎知識を系統的な学習の中で学ぶこと、被災の

体験談を聞くこと、慰霊碑や記念碑、災害メモリアルを兼ねる防災学習施設等で学ぶことも、重要な取り組みである。違いは、これら2つが「非常時に役立つ」学習であること、そしてフェーズフリーは「非常時はもちろん、日常にも役立つ」という点である。

ここまで学校にフェーズフリーを導入することの意義や目的、利点、防災教育との違いの説明を、冊子に即して説明してきた。冊子では、さらに、フェーズフリーを実践した学校から寄せられたエピソード(子どもの行動変容の様子など)と、幼稚園と小中学校のカリキュラムに沿って、教科・領域ごとのフェーズフリーの実践アイデアが合計67案、紹介されている。

最後に、本冊子は次のような言葉で締めくくられている。

「ハザードマップを用いた授業のように、防災に特化した教育は必要です。しかし、それだけでは、やはり防災は私たちのなかで「特別」なことであり続け、結局備え続けることは難しく、結果として子どもたちを守れないことになりかねません。

私たちにとって必要なことは、防災を「特別」なこととしない考え方なのです。フェーズフリーはそのような考えのもとに生まれました。

(中略)

今では日常的に使われる「エコ」や「バリアフリー」「ユニバーサルデザイン」も、一昔前には聞き慣れない言葉でした。しかし、現在ではすっかり市民権を得た言葉、概念となっています。この「フェーズフリー」も、数年後にはそのような言葉と同じように使われ、社会に浸透していることでしょう。

幼稚園入園から中学校卒業までの11年間を通して、防災を「特別」なこととしないフェーズフリーによる日々の取り組みを積み重ね、子どもたちの学力向上と生き抜く力、主体的に防災に対する姿勢を育成していきましょう。」(p.22)

特別なことに対して、私たち人間は常時備えることが難しい。こういった人間の日常感覚、常識的な心理を受容し、それに寄り添いながら、これからの時代を生きぬく力を子どもたちに育成しようとするとき、新しい形の防災のフェーズフリーは、極めて有効であるといえるだろう。

## IV. フェーズフリーの可能性と課題

### 1. 新たな社会を形成する、新しい学び方

これまで見てきたように、防災を「特別」にしない発想が必要だ、というのがフェーズフリーの考え方の根幹

にあり、災害のリスクを日常的に想起できるような生活文化を形成し、有限ではなく、持続可能な形で災害リスクに備えられる社会を形成していくことが目的となっている。学校教育が、その大きな一助となるだろうことは、鳴門市の学校での実践や本論文で紹介してきた冊子の内容からも明らかであろう。

学校教育に、新しい「〇〇教育」を導入することではなく、いまある学校生活のあらゆる場面にフェーズフリーを導入するということが、とても大きな力になる。一つ一つの実践はシンプルであるが、しかし、日常のいろいろな場面で繰り返し実践され、そして普段一緒にいる仲間と一緒に体験し、考える経験が積み重なることの意義は、大きいといえるだろう（谷村 2021a）。人智を超える自然がもたらす災害と共生する生活文化を生み出すことができれば、社会の災害対応力が上がり、社会自体の価値が高められていく。新たな社会形成の可能性がここに見えてくる。

さらに、フェーズフリーは、何度も述べるように、従来の学校教育の形を変えることなく、余分の授業時数も必要とせず、付加的に、学校現場の負担を少なくして取り入れることのできるものである。そして、何よりその意義や目的は、今日、新しく求められている学校教育のクオリティに、根本的に合致する。

鳴門の撫養小学校で行なわれた実践事例で紹介したように、複合語として習う際には、防災用語としての厳密な定義の学習までは勉強しない。津波の速さを計算することを50m走のタイムと比べるという展開は、教員が用意した授業内容ではなく児童から生み出された。従来の系統的な学習内容のつながりを重視する発想からは、こうした取り組みは出て来にくいと考えられる。

しかし、自分事として主体的に関わり、自分や身の回りのこととのかかわりを考え（対話的に考え）、その結びつきや応用可能性を探究する、学習者にとっては自らが埋めていく「余白」がたくさんある学習が、フェーズフリーによって可能になっている。用意されたカリキュラムをこなすことではなく、自ら発見的に物事に関わり、学ぶ姿勢を養うこと。不確定な要素が多いこれからの時代を生き抜くために、子どもに育成すべき能力、姿勢がフェーズフリーの発想をベースとする教育形態によって、可能となると考えられる。

そういう意味においては、フェーズフリーは、従来の教育の形態に付加的に合わせもたせることができながらも、それ自体としては、新しい学びの形、教育実践の形を生み出すものとして、これからの学校教育の可能性を広げる取り組みでもあるといえるだろう。

## 2. 安全教育としてのフェーズフリーの課題

最後に、学校教育にフェーズフリーを導入する際の課

題について述べたい。フェーズフリーの導入はまだ始まったばかりであり、課題はこれから出てくるものも多いと予想されるが、現時点で分かってきたこととして、2点挙げておく。

それは、どちらも、学校安全として考えた場合の課題である。学校教育においては、防災教育は、生活安全、交通安全とならぶ災害安全として、学校安全の3つの柱のうちの一つに位置づけられている。実は、この3つのうち、生活安全と交通安全は、フェーズフリーの発想ですでに実践されてきたと言っても過言ではない。たとえば図工の授業でハサミの安全な使い方や管理方法を教えることや、日々の登下校時に交通安全指導をすることは、日常の授業や学校生活の充実、向上と、様々なリスクへの対応方法を学習することが合わさっているからである（谷村 2021b）。

たとえば「学級内の人間関係」のフェーズを授業のフェーズに活かすことで、両者のクオリティを上げていくことが、教員の仕事では常態であることのように、教育実践を、さまざまなフェーズを往還させながらおこなうことは、先にも述べたように、実は学校教員は慣れている。

しかしながら、生活安全や交通安全で扱われるリスクは、たとえ非日常ではあっても、相対的には小さなリスクである。将来予想されている南海トラフ地震と津波のような、街ごと被災してしまうような大きなリスクは、それらとはまるでスケールが異なっていることには留意が必要だろう。

桁違いに大きなスケールのリスクにたいするフェーズフリーを行なっていく、ということは、学校においてはやはり新しい課題である。桁違いに大きなリスクについて、分からないなりに想像の幅を広げていく習慣が教員にも必要になってくるだろう。

鳴門市教育委員会で取り組まれたワークショップ型の研修では、教員に想像し、考えるための時間と場を用意し、いくつかのアイデアが生み出されてきた。こうしたアイデアを生み出し続ける必要はあるし、またアイデアだけではなく、それらを実践に落とし込み、定着させることも課題である。

また、本論文で紹介してきたように、『いつもともしもがつながる学校教育フェーズフリー』の冊子に提示された、フェーズフリーを学校に導入する意義や目的、実践アイデアは、子どもの学習を起点として考えた場合のものであった。フェーズフリーとしての子どもの学習を充実させるためには、例えば、津波の速度を教員は知っておかねばならない。一つひとつは小さなことではあるが、それはやはり教員にとっては授業準備に時間が必要となることではある。

桁違いのリスクを想像しながらフェーズフリーな授業



や学校生活を教員がデザインしていくためには、何がさらに必要だろうか。そのための手立てを考えること。これが1つ目の課題である。

そして、学校のフェーズフリーにおける、もう1つの課題も、やはり教員に関わるものである。教員の仕事は、授業だけではない。学校安全として考えた場合、防災教育に加えて防災管理という職務もある。教員のためのフェーズフリーとは、防災教育のみならず、防災管理という面においても、日常と非日常のフェーズをフリーにする発想を取り入れていけないだろうか。

2021年度の鳴門市教育委員会主催の教員研修で筆者が講師担当した回のワークショップでは、教職員の職務のフェーズフリーのアイデアを参加者全員で考えた。数は少ないが「日常も災害時も、すぐに連絡が可能となるよう、スマホや携帯電話を運動場や特別教室においても持ち歩くようにする」などの実践アイデアが生まれている。

学校防災は、現在、大きな過渡期を迎えている。都市ごと被災するような大きな自然災害への対応を、あらためて、求められているからである（谷村 2021b）。これまでに蓄積されてきた防災教育に加えて、フェーズフリーな取り組みを充実させることは、学校防災をより持続可能なものとし、より実効性のあるものとして定着させるために、不可欠な取り組みであると思われる。

## V. おわりに

鳴門市教育委員会が作成した冊子『もしもいつもがつながる学校のフェーズフリー』（鳴門市教育委員会 2021, は、2021年フェーズフリーアワード（フェーズフリー協会主催）で、全国から寄せられた140を超えるフェーズフリー事業（アイデア部門を併せると200件弱の応募）の中から、事業部門のゴールド（金賞）を受賞した。

受賞に際する審査員講評では、今日の学校教育が社会のあらゆる期待を受けて、いわゆる「〇〇教育」に忙しくしているなか、喫緊の課題である防災教育になかなか時間やエネルギーを注ぎにくいという学校の状況が説明され、そのなかで、鳴門市教育委員会が取り組む学校のフェーズフリーの意義が認められたとの言があった。（2021年フェーズフリーアワード授賞式 2021年9月11日開催 Zoomにより視聴）

先にも述べたように、フェーズフリーは防災という単独の価値に基づく取り組みではない。防災に特化した「防災教育」（〇〇教育の一つ）ではなく、学校教育の日常の現場において、教育的価値に防災という付加価値をあわせもたせるものである。受賞の総評には、「このガイドブック（筆者注、鳴門市教育委員会作成の冊子のこと）

に基づいて教育を受けた多くの人々の生涯にわたって役に立つ知識や知恵につながると考えられる」とも述べられている。

最後に、学校以外で子どもが集まる場所でのフェーズフリーの取り組みも始まっているので、紹介したい。

徳島市立住吉・城東児童館では、定期的に職員によるフェーズフリー会議を開催し、児童館のフェーズフリーを進めるアイデアを生み出し、実践を始めている。9月のフェーズフリー会議では、「もしもメモ と いつもメモ」と題するワークショップを行なった。

これは、筆者が試験的に考案したものである。全体として1時間ほどの取り組みである。まず、「もしも」の非常事態を具体的に1時間のタイムラインで想像して記述する「もしもメモ」を作成する。たとえば、今日の14時に震度7クラスの地震が起ったら？という想定で、その後の1時間の行動を、関係者が協働で様々な視点から具体的に書き出していく。

次に、それに対応して常時しておいたほうがよさそうなことを洗い出す「いつもメモ」を作成する。たとえば、ヘルメットの置き場を玄関から各部屋に変えて、非常時に素早く使用しやすくし、かつ日常時に目につきやすくして、防災啓発につなげる等である。こうした取り組みを契機として、住吉・城東児童館では様々なフェーズフリーの活動が展開されるようになっている。

まずは、想像の幅を広げ、一緒に考える時間をもつこと。ここから、フェーズフリーの取り組みが始まる。誰もがフェーズフリーの主体になりうるという前提を大事にして、人智を超える自然災害に対応可能な生活文化の形成、社会形成をめざし、そして、子どもたちがこれからの時代を生き抜く力を身につけられるよう、取り組みを続けていくことが重要だろう。

## 付記

本研究は、令和3年度学長戦略経費徳島県教育委員会等地域連携協力事業－教育委員会や学校と連携した実践的研究－において、共同研究題目「フェーズフリーの導入に関する研究」として研究助成を受けています。

## 注記

注1) 佐藤唯行氏プロフィール <https://speradius.com> から引用。

## 参考文献

佐藤唯行・西原真志・南部隆一・山崎正美子・木村恵美理 (2017)『フェーズフリー コンセプト & ガイドブック

ク』スペラディウス株式会社

谷村千絵 (2021a) 「災害と人権, そしてフェーズフリー」  
『徳島教育』第 1197 号, 1 月号 pp. 7 - 9.

谷村千絵 (2021b) 「教育哲学者が振り返る 震災・原発  
事故後 10 年 自然とつきあうこと」『教育学術新聞』  
2021 年 9 月 1 日号, 第 4 面

鳴門市教育委員会 (2021) 『もしもいつもがつながる  
学校のフェーズフリー』

鳴門市防災会議 (2018) 『鳴門市地域防災計画』(平成  
30 年 2 月発行)

鳴門市防災会議 (2021) 『鳴門市地域防災計画』(令和 3  
年 2 月発行)

フェーズフリー協会 URL <https://phasefree.org> (2021  
年 9 月 27 日閲覧)

フェーズフリーアイデアコンテスト (徳島県) [https://  
www.phasefree-tokushima.com/](https://www.phasefree-tokushima.com/) (2021 年 9 月 27 日閲覧)

「フェーズフリーアワード 2021 年受賞対象」[https://aw.  
phasefree.net/award/](https://aw.phasefree.net/award/) (2021 年 9 月 27 日閲覧)

日本放送協会 (2021) 「フェーズフリー」(「おはよう日本」  
で 2021 年 3 月 15 日に放映)